

沖縄で墜落

オスプレイの構造的欠陥と危険性明らかに

日本共産党 赤嶺議員追及で政府説明総破たん



日本共産党の赤嶺政賢衆院議員は、1月27日の予算委員会で、名護市の浅瀬に米軍普天間基地所属のMV22オスプレイが墜落・大破した事故（昨年12月）をとりあげ、オスプレイの飛行と空中給油の再開を容認した政府の姿勢を追及。政府の説明とは異なり、オスプレイが持つ構造的欠陥と危険性が明らかにになりました。要旨を紹介します。

「不時着水」というが政府も当初「墜落」現場を知る者は「なぜ不時着か」。政府説明は違いすぎる



米軍普天間基地所属のオスプレイが昨年12月13日、沖縄本島東海岸沖でMC130特殊作戦機との空中給油訓練中に接触事故を起こし、墜落・大破しました。日本政府は「機体はパイロットのコントロール下にあった」との米側の説明をうのみにして「不時着水」との言葉を使い続けています。赤嶺氏は「機体をコントロールできて

いたなら、なぜ（あと800メートルの）キャンプ・シュワブまで行って着陸しなかったのか」「なぜ固定翼モードからヘリモードに切りかえて着水しなかったのか」と指摘。沖縄防衛局が名護市に送った第一報では「墜落」と表現していたことを明らかにして、政府の認識をたどりました。

●赤嶺議員 なぜ不時着水になったのか。

○深山防衛省地方協力局長 事故の第一報を受けた時は、詳細を把握できない状況だった。

●赤嶺議員 アメリカから説明されて言い直した。現場を知る者は、『何で墜落でなくて不時着水なんだ』。余りにも見ていることと政府が言っていることは違い過ぎる。納得できる説明ではない。

「乱気流が発生」というが——気象庁「予測されていない」

航空機が引き起こす後方乱気流の可能性（赤嶺議員）

政府は、事故原因の調査は継続中としながら、米側の説明をうのみに「機体構造が原因ではない」と結論。墜落事故の6日後にオスプレイの飛行再開を容認しました。赤嶺議員は、なぜ接触に至ったのか、そこにオスプレイ特有の問題はなかったのかという「肝心の問題が全くはつきりしない」と指摘。防衛省が「給油ホースを分離させた後に、乱気流等により、給油ホースとオスプレイのプロペラが接触した」としている点をあげ、「乱気流の発生をどのよう

に伴う可能性のある悪天候は予測されていない」、「民間航空機からの報告もない」と答弁しました。赤嶺議員は、乱気流が自然現象ではなく、航空機が引き起こす後方乱気流である可能性に言及しました。

●赤嶺議員 風の影響を受けやすいオスプレイの構造的欠陥は、従来から指摘されている。MC130による後方乱気流の影響で、オスプレイがバランスを崩し、給油ホースに接触した可能性はないのか。

○深山局長 MC130自体が特に後方乱気流が大きいは承知していない。他のヘリコプターも給油を受けている。

●赤嶺議員 ほかのヘリは安全に空中給油を受けている。だったら、オスプレイの機体原因があったのではないか。フライトレコーダーとボイスレコーダーの検証や搭乗員への事情聴取などの具体的な情報提供を米側から受けているのか。

深山局長は「ボイスレコーダーを渡されたということはない」と答え、米側の説明をうのみにしていることを認めました。



に確認したのか」とただしました。深山局長は「米側から」説明を受けているところ。その後も引き続き調査を行っている」というだけで、根拠を示しません。一方、橋田気象庁長官は、事故当時「沖縄本島周辺の上空では、中程度以上の乱気流を

裏面に続く

質問動画は
コチラ⇒